

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13302

研究課題名（和文）アメリカ女性史・放送史におけるFrieda Hennockの思想と行動の再評価

研究課題名（英文）Reevaluation of Frieda Hennock's Achievements and Thoughts in the U.S. Women's and Media History

研究代表者

志柿 浩一郎 (Shigaki, Koichiro)

東洋大学・社会学部・講師

研究者番号：70734630

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1950年代のフリーダ・ヘノックの放送政策に光を当てるとともに、その背景にある彼女の政治思想を考察するものである。ヘノックは1948年に女性として初めてFCCに任命された。彼女は米国の放送業界の発展に不可欠な役割を果たし、米国の公共放送の基礎を築いた。また、メディア産業におけるジェンダーバランスの改善にも努めた。同時にヘノックはアメリカの放送に対するビジョンを持っており、それをメディア政策に反映させようとしたが、他のFCC委員や放送業界は必ずしもそれを高く評価していなかった。彼女の放送政策案は、今日の複雑な情報化社会におけるメディアの役割について重要な問題を提起しており注目に値する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、Henockが放送に果たした役割について新たな評価を提示するものである。その際に、文献や資料の分析だけでなく、ジェンダー論からの視点、放送学的視点、歴史社会学的視点などの異なる視点から、総合的に彼女の業績を再評価した。そのような作業から得られた知見は、現在、転換期にある日本の公共放送の今後のあり方を検討する上で重要な示唆を与えてくれた。また、日本のメディア界が直面している多様性の確保という課題の検討、情報発信やメディア教育のあり方を検討する上で有用な知見が得られた。

研究成果の概要（英文）：This study sheds light on Frieda Hennock's broadcasting policy while examining her political philosophy behind it. Hennock was the first woman appointed in 1948 to the FCC. She undertook an essential role in the development of US. broadcasting industries and set the groundwork for American public broadcasting. She also tried to improve the gender balance in media industries. Hennock also had a vision for American broadcasting, which she tried to incorporate with her media policy and which other FCC commission members and the broadcasting industries did not necessarily appreciate. Hennock's statements about broadcasting imply that she raised important questions regarding the media's role in today's complex and information-driven society and thus merits closer examination.

研究分野：メディア史

キーワード：メディア史 フリーダ・ヘノック 米国公共放送 教育放送 多様性 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1950年代のフリーダ・ヘノックの放送政策に光を当てるとともに、その背景にある彼女の政治思想を考察するものである。

本研究者は、博士課程在学中、アメリカの公共放送発展史における非営利コミュニティ・メディア形成の研究を行い、アメリカの公共放送が「知識共有の有効な手段としての放送」という概念の上に成立・発展してきたものであり、これがアメリカの放送業界全体に深く影響を与えている状況を明らかにした。その後も研究を続ける中で、教育



放送を中心とするアメリカの公共放送が、アメリカの放送通信事業に関する規制監督独立政府機関である連邦通信委員会 (Federal Communications Commission, 以下 FCC)の委員であった Frieda Hennock によって方向性を与えられてきたことが明らかになってきた。その後、応募者は2015年度に Harvard University, Radcliffe Institute of Advanced Study の研究助成を受け、FCC 在任中に作成された Hennock に関連する一次史料を調査する機会を得た。この調査を通じて応募者は、彼女が女性の地位の向上という問題を越えた、より広い展望のもとに日々行動し、主張していたことを示す日記やメモなどのさまざまな記録に触れることができた。

Frieda Hennock (1904 - 1960) は、ユダヤ人の父母のもとにポーランドで生まれ、6歳の時に家族と共にアメリカに移住した。その後、苦学の末に弁護士資格を取り法曹界で活動する中で、1948年に女性として初めて FCC の委員に任命された。任期中は、男性中心だったアメリカの放送の状況を変えようとしたことで知られている。彼女はまた、非営利教育放送の重要性を主張し続けた点でも大きな役割を果たした。彼女は、アメリカ社会の発展には、商業放送とは位相の異なる放送局の創出が必要であると考え、大学の運営する放送局や非営利放送局の開局を強く推進していった。1960年代以降誕生するアメリカの非営利公共放送組織は、彼女が力説した教育放送の重要性を確認する方向で展開した。

Hennock に関するこれまでの研究では、現在のアメリカの非営利メディアの基礎を築いた女性として評価されている。また、1990年代以降の研究では、ジェンダーによるハンデが存在したにも関わらず業績を残した女性の例として再評価されている (Brinson 2002, Beadle 1997 など)。このようにアメリカ放送史研究では、Hennock の存在が認知されているが、その位置づけは必ずしも明確ではない。また、アメリカ女性史研究における評価も限られている。日本のアメリカ放送史研究、女性史研究では言及されることさえも少ない。

本研究は、この Frieda Hennock の思想と行動をアメリカ女性史およびアメリカ・メディア史研究の中に位置づけつつ再評価することを通して、ジェンダー研究・マイノリティ研究・メディア研究全般の進展に貢献することを目指した。本研究では具体的に以下の二点についての検証を通して、彼女の業績を見直し、新たな評価を提起することを試みた。

1. Hennock は放送界に女性の視点を持ち込むことに尽力をし、その後、多様な視点を反映した教育放送の確立へと興味の変化したと理解されている (Weisenberger 1992, Brinson 2002 など)。しかし彼女にとっては、放送に女性の視点を反映させることも、教育放送を推進することも、商業放送とは異なる運営形態の放送を実現させる上で同様の意味を持つ課題

であった。彼女は、女性の視点を反映し、教育放送を推進することによって、放送の多様性が確保され、ひいては多民族国家アメリカ社会の発展につながると考えていた。放送業界の変革を女性の問題にとどまらず、他のマイノリティーも含めた社会全体の問題として捉える彼女の思想があった。Hennockの業績は、このように複合的な領域の中に位置付けて評価されなければならない。

2. ジェンダー、マイノリティ、メディアの領域にまたがる形で活動した Hennock の業績の中心には、多様性の創出という基本理念があった。60年代以降に高まる公民権運動や第二期フェミニズム運動以前に、社会的影響力の強い放送業界のあり方に切り込むことによって、当時はまだ広まっていなかった社会的多様性の創出と確保を目指した点に彼女の先見性、独創性がある。
3. 彼女の業績はフェミニズム運動やマイノリティの権利獲得運動への参画といった功績ではないため、ジェンダー研究やマイノリティ研究では見落とされがちである。しかし、メディアという社会的影響力の強い分野で、自分に与えられた立場で最大限に女性やマイノリティ集団を取り巻く状況を変えようとした彼女の思想と行動は、再評価する価値がある。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカ女性史およびアメリカ・メディア史研究の一環として、女性初の米国連邦通信委員会 (FCC) 委員として知られる東欧系ユダヤ人女性 Frieda Hennock (1904 -1960) の思想と行動を対象に、その業績の再評価を行うことを目的とし、ジェンダー研究およびメディア研究の深化に貢献することを目指した。

目的達成のために、本研究では以下の2つの仮説を設定し、その検証を行った。

1. 彼女の業績は、ジェンダー、マイノリティ、メディアの各領域にまたがるものとして評価されるべきこと。
2. これらの領域において1950年代当時はまだ広まっていなかった多様性の創出という基本理念に基づいて行動し、主張した点に彼女の先見性、独創性があったこと。

1.については特に、女性であるということと共に、東欧系ユダヤ人としての彼女の出自がどこまで彼女の思想と行動に関与したか、マイノリティという概念が成立する以前の時代にあって、彼女はこれをどう捉えていたのか、という点を明らかにすることを試みた。2.については、これも当時は広まっていなかった多様性という概念を彼女がどう包括的に捉えていたかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は Frieda Hennock の思想と行動を上記研究目的の視点から捉え直そうとするものであることから、複数の文書館に保管されている彼女の自筆文書および関連文書を詳細に調査し、これを同時代のジェンダー、マイノリティ、メディアの領域を中心とした背景事象に関する史料と比較考量する作業が研究の主たる部分を占めた。これが本研究の方法になる。

Harvard University, Schlesinger Library の Hennock Papers が最も重要であり、すでに実施した予備調査に基づいてさらに精細な調査を進めた。

なお、上記の研究と併せて、Hennockを知る人々や彼女に関する研究者への面談調査を行い、研究目的の達成を目指していたが、今回は最終研究段階に入るところで、コロナ禍が重なり、海

外渡航が困難な状況になったことから、当初予定していた研究方法とは異なり、文献調査が中心となる研究にとどまった。

研究手法に従いこれまで実施してきた活動は以下になる。平成 29 年度は、本研究者のこれまでの研究を踏まえた上で、女性であるということと共に、東欧系ユダヤ人としての彼女の出自がどこまで彼女の思想と行動に関与したか、マイノリティという概念が成立する以前の時代において、彼女はこれをどう捉えていたのかといった課題を念頭におき、Boston を拠点に資料収集・分析にあたった。

【調査対象機関】

【Boston】

- 1. Schlesinger Library Collection, Radcliffe Institute of Advanced Studies, Harvard University**
(Henock に関する資料、Personal Papers を保有。また、ハーバード大学のジェンダー研究・女性学に関わる研究の拠点でもある。前身は、Radcliffe College)
- 2. Jewish Women's Archive**
(Henock に関わりのあった者の論考やエッセイを保管している。)

平成 30 年度以降は、Harry S. Truman Library & Museum を拠点に、一次史料を利用した研究を継続する予定でいたが、様々な事情により実現できず、代わりに FCC の報告書を保管している U.S. Government Printing Office や放送史全般に関わる史料を保管している Library of American Broadcasting においてアメリカ放送史の全体像を把握するための調査研究を実施した。Henock が FCC 委員を務めた 1948 年から 1955 年の間の FCC や当時の放送業界の状況を、FCC 委員会の議事録など一次史料にあたることで、アメリカ放送史において Henock がいかに位置づけられるのか検証できた。

4. 研究成果

Henock の業績は、アメリカ放送史においては一定の評価を得ているものの、女性の地位の向上やマイノリティ集団の権利獲得という点ではその貢献が評価されていない。本研究は、彼女の思想と行動をメディア研究の枠を超えて、ジェンダー研究、マイノリティ研究と複合させて位置付けることによって、これまでにない新たな視点からの再評価を目指している点に特色と独創性を持つ。東欧系ユダヤ人であり、女性であり、当時はまだ珍しい実務家としてメディアの世界で活動した人物の思想と行動を対象とし、ジェンダー研究、マイノリティ研究、メディア研究の接点に関する意義あるケース・スタディを提示することができたことは、本研究の主要成果であったと考える。併せて、1950 年代のアメリカ放送界において女性やエスニック・マイノリティが置かれていた状況の一端を明らかにした。

特に、メディアの領域における彼女の思想は、現在、転換期にある日本の公共放送の今後のあり方や日本のメディア界が直面している多様性の確保という課題の検討、情報発信やメディア教育のあり方を検討する上で有用な知見が得られた。具体的には、アメリカ放送史の文脈において Henock の思想に接近し、商業放送とは異なるメディアの構築を目指した彼女の立場を明らかにできたことが大きな研究成果である。

彼女は、異なる立場を反映した放送の実現がアメリカ社会の発展に貢献すると確信していたが、当時の商業放送では限界があると考えていた。そこで彼女は、商業放送とは異なる分野の放送の発展に努め、教育放送局がチャンネル枠を確保できるよう法律で規定することを提案し、大学や教育委員会、非営利組織やコミュニティーの代表など多くの人が放送に参加するよう促し

た。その理由として、商業放送とは異なる形の放送が増えることで放送事業者間の競争が促され、放送界全体の質が向上し、ひいてはアメリカ社会が発展すると彼女は考えていた。また非営利教育放送の影響が増すことによって、多様な側面を持つアメリカ社会の現状を反映した放送が実現されると信じ、異質なものに寛容な社会になることを願った。そのような社会は、当然、女性だけではなく白人以外の人種など、マイノリティーの人々も受け入れられる社会となりえる。

東欧ユダヤ系女性弁護士という彼女のマイノリティーとしての経験が彼女を突き動かしていたのであろうが、公民権運動や第2期フェミニズムの最盛期の前に、社会的影響力の強い放送業界のあり方に切り込み、その変革を目指した彼女の業績は注目に値する。また、商業放送の限界を見極め、利益重視とは対極にある非営利教育放送の維持を主張し、アメリカ独特の放送文化を生み出す上で要の役割を果たしことは重要である。

彼女が、アメリカのメディアの現在の姿をどこまで予想していたかを知ることは不可能だが、いずれにせよ、現在、営利か非営利かに関係なく、様々なドキュメンタリー番組、報道特集、セサミストリートのような子供向け番組などが制作・放送され、そこに異なる社会文化背景を持った人々が関わっている状況は、彼女が目指した理想と一致する。アメリカでは、放送のあり方を巡る政治議論に、NPO、大学教育関係者、各地方自治体など放送事業者ではない人々も関わる。このような状況にも、教育放送に多くの人々が関わるべきであるとした Hennock の考え方が影響を与えていると言える。また、多様性を反映したメディアという概念は、アメリカにおいてコミュニティ・メディアなどの多様な非営利放送組織を形成する文化の礎となった。その後、アメリカでは様々な形態の非営利放送組織が創出されたことで、放送のあり方が様々な次元で議論されることにつながった。

Hennock が FCC 在任中に教育放送を推進する中で主張した内容や放送事業者間の競争を促すとした彼女の考え方は、現在の公共放送が果たすべき役割および情報発信組織を検討する上で貴重な示唆を与えてくれている。現在のメディアが置かれている状況と関連させた Hennock の思想の詳細な分析が求められる。

【参考文献】

Beadle, M.E., & Stephenson, A.(1997) "Frieda Hennock: Leader for educational television." *TechTrends*. Vol 42. no 6. pp. 45 – 50.

Brinson, L.S. (2002) *Personal and Public Interests: Frieda B. Hennock and the Federal Communications Commission*. CA.

Praeger Weisenberger, A.C.(1992) "Women of FCC: Activists or Tokens?" *Business and Economic History Second Series*. Vol 22. pp.192 – 198.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Koichiro Shigaki	4. 巻 56
2. 論文標題 The American Ideal of Media's Role Beyond Commercial Broadcasting: The History of the Dispute over Public Interest and the Educative Role of Media	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社アメリカ研究	6. 最初と最後の頁 27-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 志柿浩一郎	4. 巻 55
2. 論文標題 アメリカ第一主義を掲げたローレンス・デイリーの「放送の公平性」論と「イコールタイム・ルール」改正	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社アメリカ研究	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koichiro Shigaki, Christine Winkowski	4. 巻 26
2. 論文標題 "Waves of Feminism vs Flow: An Alternative Approach to Identifying Cases of Gender Norm Advancement,"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北里大学一般教育紀要	6. 最初と最後の頁 61-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koichiro Shigaki	4. 巻 60
2. 論文標題 "The First Female FCC commissioner in America: What a Second Look on Her Media Policy Reveals?"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Koichiro Shigaki
2. 発表標題 The Popular Comic Book Heroin, the first female commissioner of FCC & Unseen Feminism Movement in the 1930 's to 1950 ' s
3. 学会等名 IAMCR2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 志柿浩一郎
2. 発表標題 自由と公正性：アメリカのメディア法制史
3. 学会等名 社会情報学会東北支部研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koichiro Shigaki
2. 発表標題 Frieda Hennock ' s Media Policy in the 1950 ' s: Underrated yet Still Significant
3. 学会等名 IAMCR 2017conference in Cartagena, Colombia, July 16-20 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志柿浩一郎
2. 発表標題 公平原則と平等時間の原則：アメリカの放送政策史再考
3. 学会等名 早稲田大学アメリカ法判例研究会・同志社大学アメリカ研究所第二部門研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 志柿浩一郎
2. 発表標題 自由と公正性：アメリカのメディア法制史
3. 学会等名 社会情報学会東北支部研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 志柿浩一郎
2. 発表標題 アメリカ公共放送前史：1930年代放送メディアの教育機能を巡る議論から公共放送設立機運が高まるまで
3. 学会等名 20世紀メディア研究所 第160回研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 志柿 浩一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 アメリカ公共放送の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------